

若者へのメッセージ 54

公益財団法人 日本スポーツ協会 専務理事 森岡 裕策

【第二回】指導者としての原点

中学からはじめたバレーボールを通じて、続く高校、大学、社会人では指導者や多くの仲間たちとの出会いに恵まれた。その後も教員や行政の仕事を通じてスポーツに関わり続けてきたこれまでの歩みを記す。

教師を志す

中学の同級生と私は、同じ地元の高校に入学し、全員バレーボールを続け、運よく国体、インターハイに出場することができ、春高では、初出場でベスト8に進出し、高校選抜合宿にも選ばれた。

高校は進学校でもあり、試験期間中は練習がなく、中学時代と比べて平日は、短時間で効率的な練習を行った。

高校生活では、学業の成績はそれほど良くな

かったが、勉強することやバレーボールの楽しさを教えてくださった2人の素晴らしい恩師との出会いがあり、現在も交流が続いている。

また、バレーボールと学業の両立に悩んだ時期もあったが、私の頭の中に「バレーボールをやめる」という選択肢は全くなかった。

大きな夢でもあったオリンピック出場の目標と同時に、スポーツの楽しさや喜びを伝えられる恩師のような教師になりたいと考え、私は保健体育教師を目指す大学へ進学することにした。

今から思えば、中学では厳しさ、高校では楽



昭和56（1981）年関東大学バレーボール男女優勝大会（東京体育館）（21番が筆者）

しき、大学では奥深さ、社会人では授業の教材研究として、同じバレーボールというスポーツに接し、指導者や練習環境が変わると、考え方や見方が変わることを感じた。

大学では、全国から集まった主に教師や日本リーグを目指す先輩や同級生および後輩たちと科学的なトレーニングに取り組み、時には先輩の卒論研究の被験者などにもなり、中学、高校ではなかった競技の奥深さを実感した。

また、大学では他競技の仲間たちとも多くの交友関係を得ることができ、後々の仕事や生活に大いに影響を受けることとなった。

夜学の生徒と向き合い多くを学ぶ

大学卒業後、初任地として東京都立の夜間定時制高校に配属された。

同校には、昼間仕事をして夜間に通っている生徒もいたが、全日制を退学（自主退学等）になり、どうしても高卒の資格が必要であるという理由から、定時制に入学する生徒も多かった。

当時、テレビドラマの影響で、「校内暴力」という言葉が全国的に定着していた。私の赴任先も例外ではなかった。いわゆる「やんちゃ」な生徒も多く、家庭訪問を頻繁に行い、幾度となく近隣の警察署から呼び出された。

職場では、毎日何かしらの事件や事故が起こり、新米教員の私は、右往左往しながら、経験のある先輩教員に助けられ、一喜一憂する毎日が続いた。

その中で勤務のかたわら、バレーボールの東



昭和57（1982）年関東大学1部秋季リーグ戦（2番が筆者）

京教員チームにも所属して、週2回メンバーが集まり、全体練習などを行った。夏休み期間中の教員大会やクラブカップなどにも出場し、準優勝を果たすことができ、さらに教員チームとして台湾にも遠征して、現地3カ所を転戦し、招待試合に参加した。

思い返すと短期間ながら、テレビドラマの出来事のような事件にも遭遇した。生徒と粘り強く対話を重ねることによって、互いに理解し合い、良い方向へ変わることも多く、その分教室や教室外の放課後の楽しかった思い出も多かった。卒業式では素行の悪かった生徒が号泣するのを見て、思わずもらい泣きをしたこともある。教員として初めてのさまざまな経験により、社会人として多くを学び、充実した生活を送ることができた。この貴重な経験が私の社会人としての原点になっていると思う。

未知の世界に飛び込む

その後、地元の和歌山に戻ることになったが、未知の世界である教育委員会保健体育課という行政職に就くこととなった。生涯スポーツ、競技スポーツ各担当の計6年間の勤務を経て、改めて地元の高校の教員に復帰した。そこで初めて、男子バレーボール部の監督となった。

中学から続けてきたバレーボールの現場の指

導者となり、2年目には県大会ベスト4、3年目からは同準優勝となり、次の目標は優勝して全国大会出場という矢先、まさに青天の霹靂（へきれき）とはこのこと、校長から文部省（当時）への転籍を打診された。当然、即座に断ったが、先輩教員から強力に勧められ、後ろ髪を引かれる思いで、またも未知の世界に飛び込んだ。

同省では、地域スポーツ推進施策、国際競技力の向上、国立スポーツ科学センターならびにナショナルトレーニングセンターの創設準備、世界アンチ・ドーピング機構の設立準備ならびに拠出金の設定など、国内外のスポーツ行政分野を担当した。

10年後には、再び和歌山県教育庁スポーツ課に管理職として出向することとなった。

2015年の「紀の国わかやま国体」開催の10年前の年であった。出向中は、国体の開催準備や天皇杯獲得のための競技力向上事業などをはじめ、さまざまなスポーツ行政にも携わったが、小学4年で初めて見て感動した地元の国体にまさか再び自分が関わるとは思わなかった。

約5年間の勤務の後、再度、文部科学省スポーツ・青少年局に戻ることとなった。その後、2012年12月末、指導者に関する大きな転換点となる事案に遭遇し、担当課長としてその事案に取り組むこととなる。